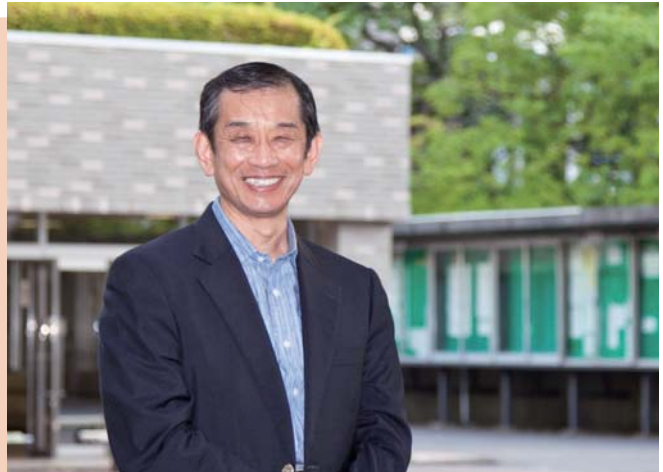


社会が進化すれば 葬儀も変化する

人間科学部長・教授 嶋根克己

しまね かつみ

略歴: 埼玉大学教養学部卒、同大学院修了。中央大学大学院単位取得退学。筑波大学助手を経て専修大学に着任。学生部長などを歴任し、2018年9月人間科学部長に就任。専門は社会学(社会意識論)。著書は「非日常を生み出す文化装置」(藤村正之との共編著)、「生きづらさの時代」(香山リカ、上野千鶴子との共著)など。趣味はスポーツ、オーディオ。



世界で最古の科学雑誌

イギリスに「フィロソフィカル・トランスアクションズ」(正式には The Philosophical Transactions of the Royal Society)¹⁾ という自然科学系の雑誌があります。最初の号が発行されたのは1665年(日本でいえば江戸時代初期)ですので、今年で創刊353年となります。現在に続く科学雑誌としては世界で最も長い歴史をもっています。あのアイザック・ニュートンやベンジャミン・フランクリンそしてチャールズ・ダーウィンなど、その後の自然科学を切り開いた有名な学者の論文も掲載されたことがあります。最近その雑誌に私の長年の研究をまとめた論文「死者との社会的つながり;



20・21世紀の葬送儀礼はどのように変化したのか」(Social bonds with the dead: how funerals transformed in the twentieth and twenty-first centuries)²⁾ が採用されましたので、その経緯と内容について簡単にご紹介したいと思います。

進化論的な死生学

2018年9月に発行された本誌(上写真)は「進化論的な死生学: 生きて人間や動物にたいする死の衝撃」(Evolutionary thanatology: impacts of the dead on the living in humans and other animals)³⁾ という特集号です。動物行動学者、考古

学者、心理学者、言語学者、哲学者そして社会学者などが18本の論文を寄稿しています。「進化論的な死生学」といっても何のことやらぴんと来ないでしょうから、少し説明してみましょう。

人間に限らずすべての動物は、生を受けた限りいつかは死にます。これはすべての動物の宿命です。しかし同類の死を知るということは生物学的にかなり高度な認知機能のようです。多くの動物は、同類が死んでもあまり気にかけないか、単にそこから立ち去るだけです。

同類の死骸を処理する動物

例外的に、集団的な生活を営む動物の一部に同類の死にたいして定型的な行動をとるものが存在します。たとえばアリやハチには、密集して生活している巣の中で同類が死ぬと、それをコロニーの外に運び出したり、仲間の死骸を食べてしまったりするものがあります。これをネクロフォレシス(necrophoresis)と呼びます。生活密度の高い社会性動物にとって、かれらの生活を維持するためには、同類の死体を処理することは避けることのできない生活の知恵だったといわれています。

またチンパンジーやゴリラの仲間などある種の霊長類においては同類の死にたいして特殊な反応を示す場合が報告されています。たとえば、母サルが養育している子サルが死んでしまうと、しばらくは生きていたかのように毛づくろいをしたり授乳行動をしたりします。しかし、あるときに子サルが「死んでいる」ことに気が付くと、急に関心を示さなくなります。子サルが死んでしまった後は、どのように働きかけても仕方がないという高度な認知機能が必要となってきます。このように動物は進化の過程で、同類の死を知るという能力を身につけてきたのです。

人間はどのようにヒトを葬ってきたのか

さて、この辺りからが研究の最前線なのですが、人間だけが同類の死にたいして、それを悼み、葬るといふ行動、すなわち葬送の儀礼を行うといわれています。またネクロフォレシス以外にも脊椎動物や哺乳類が同類の死を悼む行動をするかどうか動物行動学の焦点になっています。

では人間はいつ頃から同類の死にたいして儀礼的な行動をとってきたのでしょうか。考古学者のP. ペピットは、ホモサピエンス（現生人類）は10万年ほど前から同類の遺体を葬ってきたと考えています。そして同類の遺体にたいして文化的な多様性をもった儀礼的な行動をとるのは人間だけであると述べています。

私は日本をはじめとするさまざまな社会でお葬式を観察してきました。私が見ることができたのは現代のお葬式だけですが、アメリカ、フランスなどの欧米をはじめとして、中国、ベトナム、モンゴルなどのアジア諸国、そしてアフリカのウガンダにまで足を伸ばしたことがあります。葬儀の形式や宗教もさまざまで、それぞれの社会には、それぞれ異なった伝統や習慣があります。それらの観察の中から直感的に感じ取ったことは、お葬式は伝統的・習慣的なものと思われていますが、社会の変化に敏感に反応しているということです。

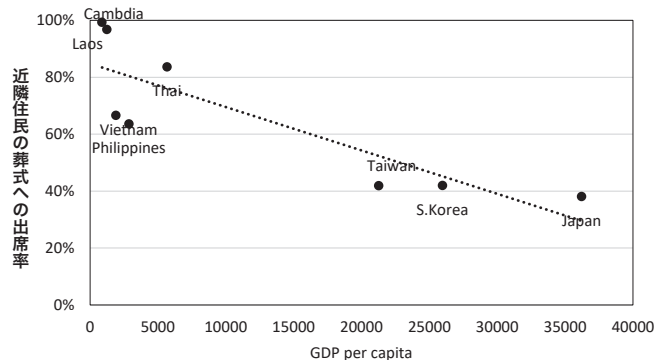
かつてはどこの社会においても、家族、親族、地域の共同体など死者に近い人たちが葬儀をとりおこなってきました。しかし社会が産業化し、都市的な生活様式が浸透してきますと葬儀の担い手だった地域共同体や親族が実施主体から徐々に離れていきます。残された小単位の家族は、葬祭業者にサービスを外注する傾向が見て取れます。私はこの現象を重要な「葬儀の近代化」と考えました。

葬儀の近代化を測定する

しかし私が観察することができたのは、ごく少数の社会での数少ない事例にすぎません。これでは世界の大きな傾向を証明したことにはなりません。しかし偶然素晴らしい機会が巡ってきました。文部科学省による私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に対する、専修大学社会知性開発センターにおける社会関係資本研究センター（2009-2013年度）、ソーシャルウェルビーイング研究センター（2014-2018年度）の申請があいついで採択されました。これらのプロジェクトの一環として、東アジア、東南アジア地域におけるアンケートによる意識調査ができたのです。その中にそれぞれの社会における葬儀とのかかわり方を示した質問を入



↑ 地域の人々によって棺が運ばれるウガンダの葬儀（2015年8月撮影）



↑ グラフ1 各国の葬儀参加率とGDP (USD) (筆者作成)

れてもらい、結果を分析することができました。

各国のデータを大雑把にまとめたものがグラフ1です。近所に住む人が亡くなった場合にお葬式に出席するかどうかを尋ねてみました。それを各国の豊かさ（GDP）と関連付けてみましたところ、経済的に発展途上の国々では葬儀への参加率が高いのですが、いわゆる経済先進国の台湾、韓国、日本では参加率は40%前後に低下してしまいます。

このように葬儀は永遠不滅に変わらぬものではなく、実は社会の近代化と深くかかわりながら急激に変化していることが理解できます。

おわりに

私の専門は社会学です。社会学は人間と人間とのかかわりを考察する学問ですが、意外なことにこれまで葬儀の近代化に関心を向けた研究はあまりなされてきませんでした。私の場合、ある方のお葬式に参加させていただいたときに、家族、親族、地域、職場など人間関係がこれほどはっきりと現れる社会現象なのに、なぜ社会学は研究対象としてこなかったのだろうという素朴な疑問が、現在の研究に結びつきました。「なぜ」という知的な好奇心が、研究の「たまご」となるのです。

1) <http://rstl.royalsocietypublishing.org/>
2) <http://rstb.royalsocietypublishing.org/content/373/1754/20170274>
3) <http://rstb.royalsocietypublishing.org/content/evolutionary-thanatology-impacts-dead-living-humans-and-other-animals>
※この文章を作成するにあたって、平成26～30年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業S1491003で得られたデータを使用しました。